

キモオタ調教第二弾
無垢で純情な魔法少女たちを弄び、
やりたいほうだいの調教生活へ陥れる！

キモオタ調教シリーズ part2

F★te! **調教★**
DREAM CLUB
~キモオタに飼われた魔法少女達~
DREAM CLU

「ハアハア……」

公園に美少女が倒れていたから思わず保護してしまっただお……」

「……う、うう……み、ゆ……る、び……」

「かわいそうに、こんな苦しそうにうなされて……」

な、何があったんだらう」

「あ、う……」

「君！ 大丈夫かい？ 君い！」

「……」

ハア

ハア

ガッ

「つく！ 意識も呼吸も極めて微弱だ！ このままじゃいけない！

早く手当をしなければ！」

「でゆふふ……この場合の適切な処置といえば……」

もちろんな人工呼吸だよね！」

「ハアハア……見れば見るほど綺麗な子だなあ……」

い、今助けてあげるからね！」

「んぢゆる！ ぷちゆう！ ぢゆるるるー！ー！」

「んぐ……ぐうう……」

「んぷちゆう！ ぢゆう！ す、すごい！ これが×学生の唇……」

「……あ、う……」

「ち、小さくって柔らかくて……なによりも、この背徳感がたまらんツ！」

「んツ……うツ……ちゅ……ちゅ……」

「おう！ い、意識がないのに僕の舌に吸い付いてきた！」

んぢゆる

ハァ

んぢゆる

ハァ

ガ
ンツ

ハァ

「んツ……ちゅる……ちゆう……」

「こ、これはエロい！ も、もっとキスすれば意識も戻るかも！」

んぢゆる！ ぢゅぷゆう……」

「あう……んツ……あツ」
「まだ苦しいのかい？ どれ、胸やお股をさすってあげよう……」
「んツ……あツ……はツ……」
「おふう！ この微妙な膨らみとおま○このプニプニ感が……
最近の×学生は発育がいいなあ……」

んんん

ゴロ

ちい

ちい

ハア
ハア
ハア

「フヒヒ……それになんだあ？」
「この子、乳首もコリコリで、おぱんちゅも湿って来てるんじゃないか？」
「あツ……んツ！ はあツ……あツ！」
「こ、声も段々色っぽくなってきちゃって……さあツ！ もう「息だぞ！」

「んぢゆる！ ちゅぷう……ぢゆるう！
ハアハア……それにしても、美味しいお口だなあ……」
「う……うツ！ う……え？ んうツ！！ ふうううー……」
「おお！ 気が付いたのかい！ 良かったよかった！」
「な、なにこれ……んぐツ！ ちゅぷう……い、いやあ！
なんで私知らない人とキスして……」

「公園で倒れていた君を僕が介抱して上げたんだよ？」
「そ、そんなの知らない！ は、放して！ むぐうツ！」
「ちゅぷう……フヒヒ！ 自分から吸い付いて来たクセに……
さあ、もっと王子様のキスをあげるお！」
『や、やめ……いやツ！ いやあツ……』



「んぢゆる！ ぢゆぷう！ ど、どうだい？ 気持ちいいだるうっ。」

「んうううッ！ いやッ！ し、舌が入って来て……」

「や、やめ……んぢゆぷう！」

「ぢゆる！ ぢゆるる！ ハアハア……」

「ぼ、僕とのキスを忘れられなくしてあげるお！」

「い、いやあ……気持ち悪い！ 気持ち悪い！！！！」

「ほ、ほら、乳首もおま○こもクリクリしてあげる……」

「んあッ！ あッ……あうッ！ やめて……か、身体がピリピリするう！」

ハア

ガッ

ハア

ハア

ジュル

くっ

くっ

にち

「フヒヒ……口では嫌がっていても身体は正直なようだねえ……
イジる度にエッチに反応してるお！」

「んちゆぷ！ んぐ……な、なんで……嫌なのに……」

「からだ、熱くて……ヘンに……」

「や、やめ……もうキスなんてイヤあ！」

「お、おかしくなっちゃ……んうう！」

「おかしくなっちゃえばいいさ……」

「そら！ んぢゆる！ ぢゆぷう！ ぢゆるるる……！」

「んぢゆる！ ぷぢゆう……あッ！ はあッ！」

「な、何か来る……へ、へんになるう！ んぐうッ！」

「デユフフ！ ひよつとしてイっちやうのかな？」

「いやらしい子だなあ……そら！ 僕とキスしながらイッちやえ！」

「ぢゆぷ！ んう！ ぢゆぷう！ んううう……ふうう……！」

「デユフフ！ ×学生のマジイキキターアッ……！」

「もっともつとイかせてあげるお！」

「や、やめて！ 触っちゃダメエ……！ はああッ……ふああーッッ！」

びん

ぶ

びん

にち

にち

びん

「ふあ……あッ……あぁ……あッ！」
「デュフフフ！ 思いつきりイっちゃったみたいだね！
そんなに気持ち良かった？」
「うあ……な、なに……これえ……か、からだか……ふわふわする……」

「おふう！ と、トロけた顔も……た、たまらん！
股間がピンピンに膨れ上がってしまおうお！」
「いやあ……なんなの……この人……きもちわるいい……」
「うう……助けてよ……るびー……美遊……どこいっちゃったの……」
「ダメ……なんだか……意識が……遠退いて……あ……う……」

てんてん

でん

でん

でん

んてん

んてん

「ハアハア……」

公園に美少女が倒れていたから思わず思わず保護してしまったお……」

「……う、うう……み、ゆ……る、び……」

「かわいそうに、こんな苦しそうにうなされて……」

な、何があったんだらう」

「あ、う……」

「君！ 大丈夫かい？ 君い！」

「……」

ハア

ハア

ガ
ア
ア
ア
ア

「つく！ 意識も呼吸も極めて微弱だ！ このままじゃいけない！

早く手当をしなければ！」

「でゆふふ……この場合の適切な処置といえば……」

もちるん人工呼吸だよね！」

「ハアハア……見れば見るほど綺麗な子だなあ……」

い、今助けてあげるからね！」

「んぢゆる！ ぷちゆう！ ぢゆるるるー！ー！」

『んぐ……ぐうう……』

「んぷちゆう！ ぢゆう！ す、すごい！ これが×学生の唇……」

『……あ、う……』

「ち、小さくって柔らかくて……なによりも、この背徳感がたまらんツ！」

『んツ……うツ……ちゅ……ちゅ……ちゅ……』

「おう！ い、意識がないのに僕の舌に吸い付いてきた！」

んぢゆる

ハァ

んぢゆる

ハァ

ガ
ンツ

ハァ

『んツ……ちゅる……ちゆう……』

「こ、これはエロい！ も、もっとキスすれば意識も戻るかも！」

んぢゆる！ ぢゅぷゆう……」

「あう……んツ……あツ」
「まだ苦しいのかい？ どれ、胸やお股をさすってあげよう……」
「んツ……あツ……はツ……」
「おふう！ この微妙な膨らみとおま○このプニプニ感が……
最近の×学生は発育がいいなあ……」

んんん

ゴロ

ちい

ちい

ハア

ハア

ハア

「フヒヒ……それになんだあ？」

「この子、乳首もコリコリで、おぱんちゅも湿って来てるんじゃないか？」

「あツ……んツ！ はあツ……あツ！」

「こ、声も段々色っぽくなってきちゃって……さあツ！ もう「息だぞ！」

「んぢゆる！ ちゅぷう……ぢゆるう！
ハアハア……それにしても、美味しいお口だなあ……」
「う……うッ！ う……え？ んうッ！！ ふうううーッ！！」
「おお！ 気が付いたのかい！ 良かったよかった！」
「な、なにこれ……んぐッ！ ちゅぷう……い、いやあ！
なんで私知らない人とキスして……」

「公園で倒れていた君を僕が介抱して上げたんだよ？」
「そ、そんなの知らない！ は、放して！ むぐうッ！」
「ちゅぷう……フヒヒ！ 自分から吸い付いて来たクセに……
さあ、もっと王子様のキスをあげるお！」
『や、やめ……いやッ！ いやあッ……』



「んぢゆる！ ぢゆぷう！ ど、どうだい？ 気持ちいいだるうっ。」

「んうううッ！！ いやッ！ し、舌が入って来て……」

「や、やめ……んぢゆぷう！」

「ぢゆる！ ぢゆるる！ ハアハア……」

「ぼ、僕とのキスを忘れられなくしてあげるお！」

「い、いやあ……気持ち悪い！ 気持ち悪い！！！！」

「ぼ、ほら、乳首もおま○こもクリクリしてあげる……」

「んあッ！ あッ……あうッ！ やめて……か、身体がピリピリするう！」

ハア

ガッガッ……

ハア

ハア

ジュル

くっくっ

くっくっ

にち

「フヒヒ……口では嫌がっていても身体は正直なようだねえ……
イジる度にエッチに反応してるお！」

「んちゆぷ！ んぐ……な、なんで……嫌なのに……
からだ、熱くて……ヘンに……」

「や、やめ……もうキスなんてイヤあ！」

「お、おかしくなっちゃ……んうう！」

「おかしくなっちゃえばいいさ……」

「そら！ んぢゆる！ ぢゆぶう！ ぢゆるるる……！」

「んぢゆる！ ぷちゆう……あッ！ はあッ！」

「な、何か来る……へ、へんになるう！ んぐうッ！」

「デユフフ！ ひよつとしてイっちやうのかな？」

「いやらしい子だなあ……そら！ 僕とキスしながらイッちやえ！」

「ぢゆぶ！ んう！ ぢゆぶう！ んううう……ふうう……！」

「デユフフ！ ×学生のマジイキキターアッ……！」

「もっともつとイかせてあげるお！」

「や、やめて！ 触っちゃダメエ……！ はああッ……ふああ……ッッ！」

びん

ぶ

びん

にち

ちん

びん

「ふあ……あッ……ああ……あッ！」
「デュフフフ！ 思いつきりイっちゃったみたいだね！
そんなに気持ち良かった？」
「うあ……な、なに……これえ……か、からだか……ふわふわする……」

「おふう！ と、トロけた顔も……た、たまらん！
股間がピンピンに膨れ上がってしまおうお！」
「いやあ……なんなの……この人……きもちわるいい……」
「うう……助けてよ……るびー……美遊……どこいっちゃったの……」
「ダメ……なんだか……意識が……遠退いて……あ……う……」

てんてん

びび

びび

びび

んん

んん





























《起きて……起きて……イリヤ……》

『あう……うう……んツ……ふあ？』

ふえ……ええ！ み、美遊うツ！』

《ふふ……やつと起きたあ……イリヤあ……》

『ど、どうして美遊が……って、私もなんで変身して……』

《イリヤはこの姿が一番カワイイから……》

ルビーを脅して服だけ変えて貰った》

『る、ルビー？ ルビーがいるの？ ど、どこ？』

《はああ……イリヤあ……ずっと会いたかったあ……》

ずちゅ

ずちゅ

んんん

えいっ

『み、美遊……ちよつと……どうしたの？』

《もう離さない……イリヤは私のもの……》

もうどこにも行かせない……》

『へんだよ？』

「イヤイヤ……キスしよ……んっ……ちゆる……」
「だ、ダメ……んっ……美遊……ちゆう」
「イヤイヤ……ずっと、こうしたかった……ちゆるる……」
「やだ……み、美遊……へんだよ……」
「どうしちゃったの……んあッ！」

ずちゅ

ずちゅ

んっ

んっ

んっ

んっ

「ぶちゅ……ちゆるる……イヤイヤの唇……」
「甘くって、柔らかくて……おいしい……」
「美遊……やめて……やめてよお……んちゅ……」

《イリヤ……もつと……もつとちようだい？

あふ……んちゅツ！》

「んううツ！んぐツ……ふううーツ！！
んちゅるぶうツ！！」

《あツ……んツ！

イリヤの唾液……おいひい……もつとお……》

「や、やめて美遊……んぐうツ……うう……ちゅぶう……」

（美遊……キス、すごい濃厚……く、クロみたい……）

ずちゅ

ずちゅ

んちゅ

ずちゅ

ずちゅ

《んちゅるる！！ぶちゅうう！

ふあツ……んちゅる！ぶちゅう……》

「ふあツ！あツ……んちゅ……ちゅるる……ぶちゅう……」

（く、クロっていうか……）

もつと……つ、つい最近覚えがあるような……）

《ふあッ! はああーッッ!》

『み、美遊! どうしたの! 大丈夫!?』

ずちゅ
ずちゅ

《へ、平気……はあッ!

あッ……んあッ! はああーッッ!》

『な、なんで急に苦しみだして……』

《はぐッ! あッ……んああッ!

ダメです……今はイリヤと……はあッ!》

『うう……どうしちゃったの……へんだよ美遊……』

《ご、ごめんなさ……イリヤあッ……

わ、私……気持ち良くてえ……ふあッ! やあああッッ!》

『……うう……そんな、エツチな声出さないで……

私までヘンな気持ちに……』

《はあッ! ああ……い、いよいよ?』

イリヤも一緒に気持ちよく……ご主人さまと一緒に……》

『あ、主人……さま?』

んあッ
んあッ
んあッ

「デュフフ! どうだい美遊たん?

僕のおち○ぽは?」

《はああッ! いい! きもちいいです!

ご主人さまのおち○ちん奥までズンズンきてますう!」

「な、なにこれ……なによこれえ! ワケわかんないよお!」

「デュフフ……いやあ……」

美遊たんの気が済むまでさせて上げたかったんだけどねえ、

ガマン出来なかつたよ」

《はあぐ! あッ! もっと突いて下さい! ご主人さまあ!》

「くほお! ロリマ○コ締め付けるうう!

やっぱ×学生はサイコーだお!」

あゝあゝ
はは

ずちっ

ずちっ

「夢だ……夢だあ! こんな夢だあ!」

《はああッ! すごいですう!

ご主人さまのおち○ちん……おま○こ、壊れちやいそうです!》

「ぐふふ……いやあ、まさかあんなに真面目だった美遊たんが、

こんなにもエッチになるなんてねえ……」

《はあ……はあ……あッ！ ああ……すごい……》

「こんなにたくさん……ナカが、いっぱい……嬉しいです……」
「フヒヒ！ 美遊たんが喜んでくれて僕も嬉しいお！」

《はあッ！ やあ……動いたら、セーエキ、溢れちゃいます……》

「それにしても、いつもより盛大にイったねえ……デユフフ！」

「大好きなイリヤさんにエッチなところ見られて興奮しちゃったのかな？」

《ああ……そんな……恥ずかしいです……》

「な、なに……なによこれ……どうなってんの……わかんないよ……」

《わからなくていいの……イリヤ……》

「あなたは私が幸せにしてあげるから……」

「やだ……もうやだあ……」

「家に帰ろうよ美遊……お願いだから……ううう……」

んんんんん

んんんんん

ハ
ア

《起きて……起きて……イリヤ……》

『あう……うう……んツ……ふあ？』

ふえ……ええ！ み、美遊うツ！』

《ふふ……やつと起きたあ……イリヤあ……》

『ど、どうして美遊が……って、私もなんで変身して……』

《イリヤはこの姿が一番カワイイから……》

ルビーを脅して服だけ変えて貰った》

『る、ルビー？ ルビーがいるの？ ど、どこ？』

《はああ……イリヤあ……ずっと会いたかったあ……》

ずちっ

ずちっ

んふい

えいっ

『み、美遊……ちよつと……どうしたの？』

《もう離さない……イリヤは私のもの……》

もうどこにも行かせない……》

『へんだよ？』

《イリヤ……キスしよ……んツ……ちゆる……》
『だ、ダメ……んツ……美遊……ちゆう』
《イリヤ……ずっと、こうしたかった……ちゆるる……》
『やだ……み、美遊……へんだよ……
どうしちやったの……んあツ!』

ずちっ

ずちっ

んっ

んっ

んっ

んっ

《ぶちゅ……ちゆるる……イリヤの唇……
甘くって、柔らかくて……おいしい……》
『美遊……やめて……やめてよお……んちゅ……』

《イリヤ……もつと……もつとちようだい？

あふ……んちゅッ！》

「んううッ！んぐッ……ふううーッ！！
んちゅるぶうッ！！」

《あッ……んッ！

イリヤの唾液……おいひい……もつとお……》

「や、やめて美遊……んぐうッ……うう……ちゅぶう……」

（美遊……キス、すごい濃厚……く、クロみたい……）

ずちゅ

ずちゅ

んちゅ

ずちゅ

《んちゅるる！！ぶちゅうう！

ふあッ……んちゅる！ぶちゅう……》

「ふあッ！あッ……んちゅ……ちゅるる……ぶちゅう……」

（く、クロってどうか……）

もつと……つ、つい最近覚えがあるような……）

《ふあッ! はあぁー!》

『み、美遊! どうしたの! 大丈夫!?』

ずちゅ

《へ、平気……はあッ!

あッ……んあッ! はあぁー!》

『な、なんで急に苦しみだして……』

《はぐッ! あッ……んああッ!

ダメです……今はイリヤと……はあッ!》

『うう……どうしちゃったの……へんだよ美遊……』

《ご、ごめんなさ……イリヤあッ……

わ、私……気持ち良くてえ……ふあッ! やあぁあッ!》

『……うう……そんな、エッチな声出さないで……

私までヘンな気持ちに……』

《はあッ! ああ……いいよお?

イリヤも一緒に気持ちよく……ご主人さまと一緒に……》

『……主人……さま?』

んあッ
んあッ
んあッ

「デュフフ! どうだい美遊たん?

僕のおち○ぽは?」

《はああッ! いい! きもちいいです!

ご主人さまのおち○ちん奥までズンズンきてますう!」

「な、なにこれ……なによこれえ! ワケわかんないよお!」

「デュフフ……いやあ……」

美遊たんの気が済むまでさせて上げたかったんだけどねえ、

ガマン出来なかつたよ」

《はあぐ! あッ! もっと突いて下さい! ご主人さまあ!》

「くほお! ロリマ○コ締め付けるうう!

やっぱ×学生はサイコーだお!」

あゝあゝ

はは

ずちっ

ずちっ

「夢だ……夢だあ! こんな夢だあ!」

《はああッ! すごいですう!

ご主人さまのおち○ちん……おま○こ、壊れちやいそうです!》

「ぐふふ……いやあ、まさかあんなに真面目だった美遊たんが、

こんなにもエッチになるなんてねえ……」

《はあ……はあ……あッ！ ああ……すごい……》

「こんなにたくさん……ナカが、いっぱい……嬉しいです……」
「フヒヒ！ 美遊たんが喜んでくれて僕も嬉しいお！」

《はあッ！ やあ……動いたら、セーエキ、溢れちゃいます……》

「それにしても、いつもより盛大にイったねえ……デユフフ！」

「大好きなイリヤさんにエッチなところ見られて興奮しちゃったのかな？」

《ああ……そんな……恥ずかしいです……》

「な、なに……なによこれ……どうなってんの……わかんないよ……」

《わからなくていいの……イリヤ……》

「あなたは私が幸せにしてあげるから……」

「やだ……もうやだあ……」

「家に帰ろうよ美遊……お願いだから……ううう……」

んんんんん

んんんんん

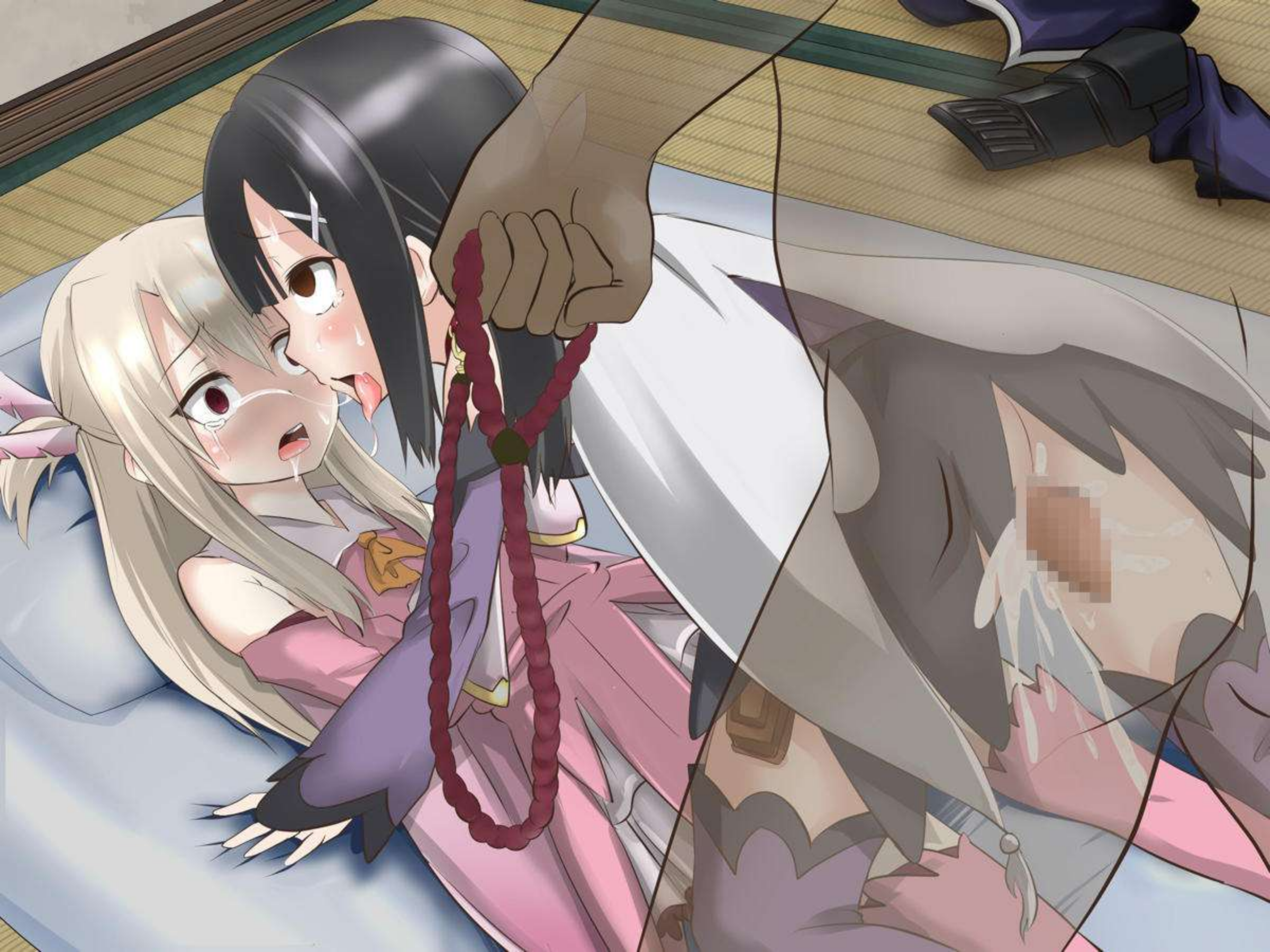
ハ
ア



























「でゆふ！ 散歩に来たらまたエロい×学生に遭遇してしまった……
よくよく縁があるなあ……」

【な、なにコイツ……きやあッ！ さ、触らないで！】

い、今触られたら……はあッ！】

「そこの茂みでオナミししてた子が何言ってるんだい？」

さあ、僕が手伝ってあげるよ」

【ち、違うわよアレは……い、色々事情があるのよ！】

「はあはあ……ピチピチの小ぶりなおっぱいにお尻……これはたまらん！」

【こいつ話聞いてないし……ひうッ！ あッ……はあッ！】

んん……

んん……

んん……

んん……

んん……

んん……

「フヒヒ……もう身体は出来上がっちゃってるみたいだね……」

【はああッ！ つくあ……あッ！ な、なんで……身体が、おかしい……】

【アソコになにか挿入ってくる感じがする……】

なにも、ないのに……はぐッ！ あ……ああ……はあッ！】

「さあ、僕に身をゆだねて……たっぷり気持ちよくしてあげるお！」

【ひやうツ！ はあツ！ ちょ、直接……】

「フヒビ……褐色肌にピンク色の乳首がエロいねえ……」

おま○この中も桜みたいにキレイだお！」

【はあツ！んツ……そんな触っちゃ……あぐツ！

はあああーんツツツ！】

（な、なんなのよさつきから……）

アツヨが、なにか太いので掻き回されてるみたいな……）

んん

んん

んん

んん

んん

んん

（こいつの指じゃないし……まさか、イリヤの方から流れてきてる感覚？）
（つていうか、肌から流れ込んでくるコイツの魔力……なんて、強くて……）
「どうだい？ 気持ちいいかい？」

【き、きもちい……ひぐうツ！ ああツ……はああツ！】

【いやあ……だめえこんなの……すぐ来るう……来ちゃう……
あツ！ はああツ！】

【や、やめ……ひやうツ！ あツ……あああ……ッツッ！】

「元から感度もいいみたいだけど、

イッたばっかりだから余計に感じちやうでしょ？」

（い、イリヤの感覚がダブって……か、身体中が犯されてるみたい……）

「ピンピンの乳首も、ぐちよぐちよの口○ま○こも、
もっと弄ってあげるお！」

あゝ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

【い、いや……あああツ！

だ、だめえ……そ、そんなにしたら……あぐうツ！】

【ああ……き、気持ちいいのが……と、止まらない……

はあツ！ あああツ！！】

【だ、ダメ……こ、これ以上は……はああツ！

と、とぶう……とんじゃううツ！！】

【ああッ！ あああああ~~~~~~~~ッッッ！】

「おふうッ！ ×学生のマジイキキタあああ！」

そらそら！ イキながら弄ってあげるお！」

【んううッ！！ ああッ！！ ああああッッ！！】

「でゅふふふ！！ イったまんま帰ってこなくていいよ！

そらとんじゃええ！ ホントにとんじゃええ！！」



【だ、だめもお……ああッ！ はあああー~~~~~~~~ッッ！！】

「こんなことされるの初めてでしょ？」

今日のこと「一生の思い出にしてあげるからね！」

【~~~~~ッ！！~~~~~ッッ！！】

「でゅふふ！ 声すら出せずに痙攣してるお！」

【ああッ……あッ……ああ……】

「フヒヒ……ずっとイキッ放しだったね。

何回くらいイったのかなあ？」

【あッ……うッ……ああ……あッ！】

「お返事もできないか。美遊ちゃんも

イリヤちゃんもなかなかの逸材だったけど、

感じやすさとイキやすさは君の方が上だなあ……」

【みゅ……いり、や？】

「フヒヒ！ 気になるかい？」

それじゃ、僕の家まで会いに行こうか？」

「今頃二人でお楽しみのはずだよ……」

帰る頃には終わってるだろうから……

でゆふふ！ 四人で楽しもうね？」

【はあ……あッ！ あ……あ……】

な、に……どうなって……る、の……これえ……】

「でゆふ！ 散歩に来たらまたエロい×学生に遭遇してしまった……
よくよく縁があるなあ……」

【な、なにコイツ……きやあツ！ さ、触らないで！
い、今触られたら……はあッ！】

「そこの茂みでオナミししてた子が何言ってるんだい？

さあ、僕が手伝ってあげるよ」

【ち、違うわよアレは……い、色々事情があるのよ！】

「はあはあ……ピチピチの小ぶりなおっぱいにお尻……これはたまらん！」

【こいつ話聞いてないし……ひうツ！ あツ……はあッ！】

んん……

んん……

んん……

んん……

んん……

んん……

「フヒヒ……もう身体は出来上がっちゃってるみたいだね……」

【はああツ！ つくあ……あツ！ な、なんで……身体が、おかしい……】

【アソコになにか挿入ってくる感じがする……】

なにも、ないのに……はぐツ！ あ……ああ……はあツ！】

「さあ、僕に身をゆだねて……たっぷり気持ちよくしてあげるお！」

【ひゃうツ！ はあツ！ ちょ、直接……】

「フヒビ……褐色肌にピンク色の乳首がエロいねえ……」

おま○この中も桜みたいにキレイだお！」

【はあツ！んツ……そんな触っちゃ……あぐツ！

はあああーんツツツツツ！】

（な、なんなのよさつきから……）

アツヨが、なにか太いので掻き回されてるみたいなの……）

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

（こいつの指じゃないし……まさか、イリヤの方から流れてきてる感覚？）
（つていうか、肌から流れ込んでくるコイツの魔力……なんて、強くて……）
「どうだい？ 気持ちいいかい？」

【き、きもちい……ひぐうツ！ ああツ……はああツ！】

【いやあ……だめえこんなの……すぐ来るう……来ちゃう……】

あツ！ はああツ！】

【や、やめ……ひやうツ！ あツ……ああ……ッツッ！】

「元から感度もいいみたいだけど、

イッたばっかりだから余計に感じちやうでしょ？」

（い、イリヤの感覚がダブって……か、身体中が犯されてるみたい……）

「ピンピンの乳首も、ぐちよぐちよの口○ま○こも、
もっと弄ってあげるお！」

あゝ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

【い、いや……ああッ！

だ、だめえ……そ、そんなにしたら……あぐうツ！】

【ああ……き、気持ちいいのが……と、止まらない……

はあッ！ あああッ！！】

【だ、ダメ……こ、これ以上は……はああッ！

と、とぶう……とんじやううツ！！】

【ああッ！ ああああ~~~~~~~~ッッ！！】

「おふうッ！ ×学生のマジイキキタああ！！」

そらそら！ イキながら弄ってあげるお！」

【んううッ！！ ああッ！！ ああああッッ！！】

「でゅふふふ！！ イったまんま帰ってこなくていいよ！

そらとんじゃええ！ ホントにとんじゃええ！！」



【だ、だめもお……ああッ！ はあああ~~~~~~~~ッッ！！】

「こんなことされるの初めてでしょ？」

今日のこと「一生の思い出にしてあげるからね！」

【~~~~ッ！~~~~~~~~ッッ！！】

「でゅふふ！ 声すら出せずに痙攣してるお！」

【ああッ……ああッ……ああッ……ああッ……】

「フヒヒ……ずっとイキッ放しだったね。」

何回くらいイったのかなあ?」

【あッ……うッ……ああ……あッ!】

「お返事もできないか。美遊ちゃんも

イリヤちゃんもなかなかの逸材だったけど、

感じやすさとイキやすさは君の方が上だなあ……」

【みゅ……いり、や?】

「フヒヒ! 気になるかい?」

それじゃ、僕の家まで会いに行こうか?」

「今頃二人でお楽しみのはずだよ……」

帰る頃には終わってるだろうから……

でゆふふ! 四人で楽しもうね?」

【はあ……あッ! あ……あ……】

な、に……どうなって……る、の……これえ……】

























《んツ！ はああ……イリヤ……》

ちよつと待ってて……すぐ、用意するから……》

『や、やめてよ美遊……』

正気に戻って……こんなところ、逃げようよ……』

《……どうして？

私はその必要を感じない》

『だって、あんな、ヒドいことされてるのに……』

ほら、今ならアイツもいないし……』

《私が頼んで出かけてもらったから……》

『そ、そうなの？ どうして……』

《さっきみたいに邪魔されたくないの……》

イリヤとの、初めてだから……》

『や、やめてよ美遊……』

そ、そんなトコロに、そんなもの挿入れちゃ……』

《イリヤ……好き……愛してる……》

『や、やめて美遊……ふあツ！ あツ……あああツ！！』

『はあぐらッ！ やあッ！ は、挿入って……ああッ！
やめてえ！ やぶれける！ やぶけちやうう！』

《ああッ！ イリヤとの初めて……
イリヤの初めてが私のものだ……うふふ……》

《でも、ごめんね、イリヤ……

わたしの初めては、ご主人さまに奪われちゃった……》

『痛い……痛いッ！』

抜いて美遊……お願い抜いてえ！』

《大丈夫……すぐ気持ちよくなるから……

んッ！ はあッ！ はあッッ！』

《ああッ！ イリヤのナカ……感じる！

私、イリヤとひとつにい……》

『痛いよ……やめて美遊……やめてえ！』

《ごめん、イリヤ……私だけ、ちよつとイっちゃった……》

『美遊……なんで、こんなこと……もうやめてよお……』

《んツ！ ああツ……ふあツ！

奥まで……ゴリゴリ来てる……イリヤの子宮、感じる《んツ！ ぐう……あツ！

ダメえ……なんか、だんだんへんを感じて……』

《ふあツ！ イリヤ……感じてきたの？

もつと、感じて……私を……もつとお！》

『み、美遊……ダメえ！ あぐツ！ は、激しすぎる……』

《ああ……イリヤ……好き……好き……身体が……止まらない！》

『はあぐツ！ だ、だめ美遊……そんなにしたらあ……いやあツ！』

《もつと……もつと感じて！ んあツ！ はああツ！》

『ああツ……うぐツ！

な、なにか来るう……へんなのが……知らないのが……』

あ……♡

《ああツ！ わ、私ももう……んあツ！

ん……イク……いつちやう……』

ん……怖い……こんな……ああツ！

はああ……ツツ……』

《はあ……はあ……いつちやった……イリヤといっしょか……》

『あッ……うッ！ なに、今の……頭、真っ白になって……』

《イリヤ……ねえ、もう一回……》

『やめて……もう無理い……』

美遊……なんでこんなことするの……』

《……だって、イリヤのこと好きだから……》

『それでも、こんなのぜったいおかしいよ……』

《何も考えなくていいの……》

なにかも忘れて……私だけを見て……イリヤ……》

ふん

ん

ん

ん

ん

ん

『あうッ！ も、もうダメ……ムリ、

ムリだから……これ以上は……死んじゃうから……』

《大丈夫……私も、最初はそう思ったけど、

すぐに慣れたから……んッ！ ふあッ！》

『ああッ！ やだ……やだ……もうやだあ……』

《んツ！ はああ……イリヤ……》

ちよつと待ってて……すぐ、用意するから……》

「や、やめてよ美遊……」

正気に戻って……こんなところ、逃げようよ……」

《……どうして？

私はその必要を感じない》

「だって、あんな、ヒドいことされてるのに……」

ほら、今ならアイツもいないし……」

《私が頼んで出かけてもらったから……》

「そ、そうなの？ どうして……」

《さっきみたいに邪魔されたくないの……

イリヤとの、初めてだから……》

「や、やめてよ美遊……」

そ、そんなトコに、そんなもの挿入れちゃ……」

《イリヤ……好き……愛してる……》

「や、やめて美遊……ふあツ！ あツ……あああツ！！」

『はあぐうツ！ やあツ！ は、挿入って……ああツ！
やめてえ！ やぶれける！ やぶれちゃううう！』

《ああツ！ イリヤとの初めて……
イリヤの初めてが私のものだ……うふふ……》

《でも、ごめんね、イリヤ……

わたしの初めては、ご主人さまに奪われちゃった……》

『痛い……痛いッ！』

抜いて美遊……お願い抜いてえ！』

《大丈夫……すぐ気持ちよくなるから……

んツ！ はあツ！ はああツツ！』

《ああツ！ イリヤのナカ……感じる！

私、イリヤとひとつにい……》

『痛いよ……やめて美遊……やめてえ！』

《ごめん、イリヤ……私だけ、ちよつとイっちゃった……》

『美遊……なんで、こんなこと……もうやめてよお……』

『らッッ！う、う、う、らちゃ……あッッ！』

《すごい……感じる……イリヤのナカ……
すごく柔らかくて……きもちいい！》

『や、やめてえ……あぐう！』

『こわれる！ こわれちゃううう！！』

《あッ！ はああ……ふふッ、

イリヤの泣き顔……カワイイ……もっと見たい》

『ああッ！ ナカが……わ、私のナカが……

ぐちゃって……ぐちゃってるう……』

《はあッ！ イリヤの子宮にゴリっしたら……

反動が、私の奥まで返ってきて……あッ！》

あッ♡

あッ♡

あッ♡

『やめて美遊う！ 死んじゃう！』

『こんなことしたら、二人とも死んじゃうう！』

《大丈夫だよイリヤ……

いっっしょに、気持ちよくなる……んあッ！》

ず♡

ず♡

ず♡

ず♡

《んツ！ ああツ……ふあツ！

奥まで……ゴリゴリ来てる……イリヤの子宮、感じる《

「んツ！ ぐう……あツ！

ダメえ……なんか、だんだんへんな感じに……」

《ふあツ！ イリヤ……感じてきたの？

もつと、感じて……私を……もつとお！《

「み、美遊……ダメえ！ あぐツ！ は、激しすぎる……」

《ああ……イリヤ……好き……好き……身体が……止まらない！《

「はあぐツ！ だ、だめ美遊……そんなにしたらあ……いやあツ！」

《もつと……もつと感じて！ んあツ！ はああツ！《

「ああツ……うぐツ！

な、なにか来るう……へんなのが……知らないのが……」

あ……♡

《ああツ！ わ、私ももう……んあツ！

「い、イク……いつちやう……」

「い、いや……怖い……こんな……ああツ！

はあああ……ツツ……」

《はあ……はあ……いつちやった……イリヤといっしょに……》

『あッ……うッ！ なに、今の……頭、真っ白になって……』

《イリヤ……ねえ、もう一回……》

『やめて……もう無理い……』

美遊……なんでこんなことするの……』

《……だって、イリヤのこと好きだから……》

『それでも、こんなのぜったいおかしいよ……』

《何も考えなくていいの……》

なにかも忘れて……私だけを見て……イリヤ……》

ふん

んん

んん

ちんちん

ちんちん

んん

『あうッ！ も、もうダメ……ムリ、

ムリだから……これ以上は……死んじゃうから……』

《大丈夫……私も、最初はそう思ったけど、

すぐに慣れたから……んッ！ ふあッ！》

『ああッ！ やだ……やだ……もうやだあ……』

























「でゅふふ……ほおら、みんなの大好きなおち○ぼだよ？
仲良くペロペロしてね？」

《んちゅ……はああ……ご主人さまのおち○ぼ……ステキです……》
「これ……すっごい……」

舐めてるだけで魔力が満ちてきて……」

「うう……臭い……汚い……」

もうやめてよ美遊……クロまでえ……」

「だってしようがないじゃない……」

こんな上質の魔力、

一度知ったらやめられないもの」

「ふあ……んツ！ 身体がウズいて、

熱くなってきちゃう……はあ……」

「くう！ クロちゃんのエロい吐息が亀頭を包むう！」

《ご主人さま……私も……んちゅ……》

「おう！ 流石、僕が鍛えた美遊ちゃん！

テクニックは一番だね！」

「うう……この人、気持ち悪い……」

「でゅふふ！ イリヤちゃんの初々しさもいい味出してるなあ……」

「そら！ もっと頑張ってペロペロするんだ！」
「ふあッ……んッ！ 舌が……トロけそう……」
《はあ……ちゅぱッ！ あッ！ ご主人さま……気持ちいいですか？》
「うう、二人のツバとおち○ちんの味で……だんだんへんな気分だ……」

「つく！ これは絶景！」

美○女3人がエロい顔で僕のチ○コを舐め合ってるだなんて！

「ぢゆる！ ちゅ……うふふ、ピクピクしちゃって、カワイイ……」

《ご主人さま……いつでも出してください……私たちの顔に……》

「美遊ちゃんはみんなでいっしょにぶっかけがお望みかい？」

ふひひ！ いいですともー！

「きやう！ な、なに……急にはねて……」

くっくっく

「つく！ イクうう！」

「きやはッ！ 出た出た！ すっごおい！」

《はああッ！ ご主人さまの濃い〜セーエキの……きよす……》

うっ！

「きやあッ！ な、なにこれ……熱い！ 臭いいい！」

《ご主人さま！ もっと！ もっとかけて下さい！》

「いやあッ！ 美遊ばかりずるい！ こっちにもちようだい！」

「くお！ そ、そんなにされたら……と、とまらん……！」

びびるんわー

ぶぶぶ

ゴッ

ゴッ

「はあはあ……最後の一滴まで一気にでちゃったぞ」

「ちゅぱッ……ちゅる……あん……すごい精液……魔力の塊みたい……」
《ふああ……ご主人さまのセーエキがいっぱい……いっぱい……》
「し、白いおしっこ？ なにこれ……病気のの？」

なんで二人とも……

そんな気持ちよさそうにしてるの……」

ぬさぐ

ゴエ

ぬさぐ

ゴエ

ゴエ

でゅっ？

「でゅふふ！ どうやらイリヤちゃんだけは、

まだまだお子さまみたいだねえ……」

「なによ……なんなの……もうワケわかんない……」

「大丈夫、イリヤちゃんも、すぐ二人みたいに

僕のおち○ぽ大好きにしてあげるからね……でゅふふふ！……」

ぬさぐ

「でゆふふ……ほおら、みんなの大好きなおち○ぼだよ？
仲良くペロペロしてね？」

《んちゅ……はああ……ご主人さまのおち○ぼ……ステキです……》
「これ……すっごい……」

舐めてるだけで魔力が満ちてきて……」

「うう……臭い……汚い……」

もうやめてよ美遊……クロまでえ……」

「だってしようがないじゃない……」

こんな上質の魔力、

一度知ったらやめられないもの」

「ふあ……んツ！ 身体がウズいて、

熱くなってきちゃう……はあ……」

「くう！ クロちゃんのエロい吐息が亀頭を包むうー！」

《ご主人さま……私も……んちゅ……》

「おう！ 流石、僕が鍛えた美遊ちゃん！

テクニックは一番だね！」

「うう……この人、気持ち悪い……」

「でゆふふ！ イリヤちゃんの初々しさもいい味出してるなあ……」

いい味出してるなあ……

「つく！ イクうう！」

「きやはッ！ 出た出た！ すっごおい！」

《はああッ！ ご主人さまの濃いらせーエキの……きよす……》

うっ！

「きやあッ！ な、なにこれ……熱い！ 臭いいい！」

《ご主人さま！ もっと！ もっとかけて下さい！》

「いやあッ！ 美遊ばかりずるい！ こっちにもちようだい！」

「くお！ そ、そんなにされたら……と、とまらん……！」

びびる

びびる

ゴエ

ゴエ

「はあはあ……最後の一滴まで一気にでちゃったぞ」

「ちゅぱッ……ちゅる……あん……すごい精液……魔力の塊みたい……」
《ふああ……ご主人さまのセーエキがいっぱい……いっぱい……》
「し、白いおしっこ？ なにこれ……病気のの？」

なんで二人とも……

そんな気持ちよさそうにしてるの……」

ぬさぐ

ゴエ

ぐんぐん

ゴエ

ゴエ

でゅっ？

「でゅふふ！ どうやらイリヤちゃんだけは、

まだまだお子さまみたいだねえ……」

「なによ……なんなの……もうワケわかんない……」

「大丈夫、イリヤちゃんも、すぐ二人みたいに

僕のおち○ぽ大好きにしてあげるからね……でゅふふふ！……」

ぬさぐ

















「でゅふふ！ まるで夢のような光景！」
「うう、こんな格好……恥ずかしくて死にそう！」
「もう、お兄さまってばヘンタイなんだから……」
「3人ともたっぷりジュースは飲んだよね？」
「今からおしっこガマン大会だよ！」
《ガマン大会ですか？》

「そうそう……一番おしっこをガマン出来た子が優勝！」
「優勝したらどうなるの？」

「デュフフ！ 一番最初におち○ぽをあげるよ！」

「そ、そんなの絶対いらない！」

「でゅふ！」

それならガマンせずにおしっこしちゃうことだね……いくよー！」

「きやあッ！ ああッ……な、ナカでブルブル動いてえ！」

《あう……振動がお腹まで響く……ひうッ！ んッ！ くああ……》

「ひぐッ！ い、イリヤの快感まで流れ込んできて……

はああッ！……こ、これえ……キツい、かも……はああッ！」

「さて、誰が一番ガマンできるかなあ？」

「ああ……あッ！ あたま、しびれるう……

こんなの……ガマンなんて……」

へっへっ……

「だ、ダメよイリヤ……あんたがいったら私までいっっちゃう……」

《ああ……んッ！ こ、ご主人さま……こ、こんなのひどいです》

「ハアッ……ハアッ……

ほら、もっと力を込めないと、すぐにお漏らししちゃうぞお？」

「んぎい……あッ！ うッ……だめえ……歯ちやう……」
「あ、脚がしびれて……た、立ってられない……はあッ！」
「んッ！ くあ……あッ！ うう……」
「でゅふふ！ かわいいお顔とお尻が三つも並んで……た、たまらん！」

「はうッ……あッ！ くう……」
「んッ！ いう……あッ！ はぐッ！」

「だ……め……んあッ！ はう……」
「脚もお尻もプルプルさせて、みんな頑張るなあ……」
「ふひひ！ そんなに頑張ってる姿を見せられたら……悪戯したくなってきたぞ！」



《ふあああ~~~~ツツ!!》

「いやああツツ!! おしっこお!

とまらない! とまらないいい!!」

「やだッ! やだやだやだあ!

出ないでえ! とまって! とまってええ!!」

「ほふう! す、すごい!

三人一気にするとすごい迫力だ! だ、匂いも!

めあつ

「だ、だめえ! 見ないで! 嗅がないでえ! いやああ!!」

「でゆふふ!!」

お友達といっしょにイキながらおもしろにするの気持ちいい?

じいばああ

いぶがあ

【きもちいい! きもちいいよお! おしっこかきもちらら~】

《ああ……イリヤのおしっこが私のおしっことまざってる……》

「いやあッ! いやあッ!

もうイヤもうイヤもうイヤあああーッ!」

「はあ……はあ……でちゃった……ぜんぶ……はああ……」

《すごい……膀胱が、一気にからっぽになって……》

あたまが、クラクラする……》

「うう……ふええ……なんで、

こんなこと……こんなもの、おかしいよお……」

「お風呂場がみんなのおしっこでいっぱいになっちゃったねえ……

ごりやしばらく、お風呂入るたびに思い出しちゃうなあ……」

「やん……お兄ちゃんったら、ヘンタ〜イ……」

「この、野蛮人……チカン……」

「でめふふ！ それじゃ、結果を踏まえてご褒美タイムといこうか！」

「同時に見えて、ちゃ〜んと順番見てたからね！ でめふふふ！」

「でゅふふ！ まるで夢のような光景！」

「うう、こんな格好……恥ずかしくて死にそう！」

「もう、お兄さまってばヘンタイなんだから……」

「3人ともたっぷりジュースは飲んだよね？」

「今からおしっこガマン大会だよ！」

《ガマン大会ですか？》

「そうそう……一番おしっこをガマン出来た子が優勝！」

「優勝したらどうなるの？」

「デュフフ！ 一番最初におち○ぽをあげるよ！」

「そ、そんなの絶対いらない！」

「でゅふふ！」

「それならガマンせずにおしっこしちゃうことだね……いくよ！」

「きやあッ！ ああッ……な、ナカでブルブル動いてえ！」

《あう……振動がお腹まで響く……ひうッ！ んッ！ くああ……》

「ひぐッ！ い、イリヤの快感まで流れ込んできて……

はああッ！……こ、これえ……キツい、かも……はああッ！」

「さうて、誰が一番ガマンできるかなあ？」

「ああ……あッ！ あたま、しびれるう……

こんなの……ガマンなんて……」

へっへっ……

「だ、ダメよイリヤ……あんたがいったら私までいっっちゃう……」

《ああ……んッ！ こ、ご主人さま……こ、こんなのひどいです》

「ハアッ……ハアッ……

ほら、もっと力を込めないと、すぐにお漏らししちゃうぞお？」

「んぎい……あッ！ うッ……だめえ……歯ちやう……」
「あ、脚がしびれて……た、立ってられない……はあッ！」
「んッ！ くあ……あッ！ うう……」
「でゅふふ！ かわいいお顔とお尻が三つも並んで……た、たまらん！」

「はうッ……あッ！ くう……」
「んッ！ いう……あッ！ はぐッ！」

「だ……め……んあッ！ はう……」
「脚もお尻もプルプルさせて、みんな頑張るなあ……」
「ふひひ！ そんなに頑張ってる姿を見せられたら……悪
戯したくなってきたぞ！」



《ふあああ~~~~ツツ!!》

「いやああツツ!! おしっこお!

とまらない! とまらないいい!!」

「やだッ! やだやだやだあ!

出ないでえ! とまって! とまってええ!!」

「ほふう! す、すごい!

三人一気になるとすごい迫力だ! に、匂いも!

めめっ

「だ、だめえ! 見ないで! 嗅がないでえ! いやああ!!」

「でゅふふ!!」

お友達といっしょにイキながらおもしろにするの気持ちいい?

じいばああ

いぶがあ

【きもちいい! きもちいいよお! おしっこかきまららー!】

《ああ……イリヤのおしっこが私のおしっことまざってる……》

「いやあッ! いやあッ!

もうイヤもうイヤもうイヤあああーッ!」

「はあ……はあ……でちゃった……ぜんぶ……はああ……」

《すごい……膀胱が、一気にからっぽになって……》

あたまが、クラクラする……》

「うう……ふええ……なんで、

こんなこと……こんなもの、おかしいよお……」

「お風呂場がみんなのおしっこでいっぱいになっちゃったねえ……

ごりやしぱらく、お風呂入るたびに思い出しちゃうなあ……」

「やん……お兄ちゃんったら、ヘンタ〜イ……」

「この、野蛮人……チカン……」

「でめふふ！ それじゃ、結果を踏まえてご褒美タイムといこうか！」

「同時に見えて、ちゃくんと順番見てたからね！ でめふふふ！」

























「フヒヒ！ まずはイリヤさんのおま○こいただきまゝす！」
『いぐツ！ ふツ！ だ、だめえ……』
は、はいらない……そんな大きいの……」

『だ、だめえ……絶対だめえ！ いやッ！』

やめてえ！ んぐうッ！ んうう~~~~ッッ！』

「くう！ 処女は美遊さんに譲っちゃったから残念だけど……」

流石ロ○マ○コ！ 処女のような締め付け！」

『んッ！ うう……信じられない！ 信じられない！』

こんなカッコで、こんな奴に……私……」

ぐんぐん

ぢぢぢ

「あ、でも、生チ○ポで突かれるのは初めてだよね！」

でゆふ！ どうかかな？ 生まれて初めてのチ○ポの味は！」

『痛い……熱い……気持ち悪い……抜いて……お願い抜いてえ……』

「おやおや素直じゃないなあ……」

下のお口はこんなに僕のチ○ポを締め付けてるのに」

『ウソだ……こんなのウソだあ……ウソだ……』

絶対ウソ……ふあッ！ はああッ！！』

ぢぢぢ

「さして！ しっかり窓枠持っててね！ 動くよ！ イリヤちゃん！」
『はあぐツ！ い、イヤ……奥まで挿入ってきて……うぐうツ！』
「はあはあ……イリヤちゃん！」

イリヤちゃんの子宮におち○ちんゴリゴリしてるお！」

くはっ

んんん

ぐん

おん

『うぐう……あツ！ はああ……んぐツ！ あうツ！』

「フヒヒ！ 分かってるねえ……しっかり声を押さえるんだよ？」

誰かに恥ずかしい姿を見られちゃうかもだからね！」

『さ、サイテー……んあツ！ あツ！ ぐう……はあツ！ あツ！』

（こ、声が出ちゃう……でも手を離したら、窓から落ちる！）

『はあツ！ あツ！ ふぐう……うツ！』

「んくツ……ふあツ！ あツ……はあツ！」
「でゆふふ！ 段々とエロい声になってきたねえ……
気持ちよくなってきたの？」

しびる

「やめて……もうやめてえ……怖くて……」

痛くてえ……恥ずかしくて……あうツ！」

「あンツ！ そ、そんなに突いたら……」

お、落ちる……落ちちゃう！」

「フヒヒ！ 大丈夫だよ……」

イリヤちゃんは今、僕と合体してるんだから！」

「ほら！ わかる？ 僕のチ○コが

イリヤちゃんの一番奥深くまで差し込まれてるの！」

「いやあ……あぐツ！ あツ……ああツ！」

や、やめて……痛い！ 怖い！」

「つく！ そんなに締め付けたら……」

ああツ！ もうガマン出来ない！」

ぐわん

ぐわん

ぐわん

ぐわん

「ふううう……出た出た……もう金玉カラツカラだよ」

『あッ……ううう……』

「どうだいイリヤたん、僕のドロドロザーメンの感想は？」

ぐんぐん

てん

ぐんぐん

てん

てん

『なによ……何言ってるのかわかんないよお……』

『あう……あッ！ し、白いおしっこがあ……』

私のナカから……垂れてきて……』

『そ、そんなあ……こ、これが……』

私の身体のナカに……い、いっぱい……いっぱい……』

『う……ううッ……もうやだあ……』

助けて……お兄ちゃん……お兄ちゃん……』

「フヒヒ！ まずはイリヤさんのおま○こいただきまゝす！」
『いぐツ！ ふツ！ だ、だめえ……』
は、はいらない……そんな大きいの……」

「だ、だめえ……絶対だめえ！ いやッ！」

やめてえ！ んぐうッ！ んうう~~~~ッッ！！」

「くう！ 処女は美遊さんに譲っちゃったから残念だけど……」

流石ロ○マ○コ！ 処女のような締め付け！」

「んッ！ うう……信じられない！ 信じられない！」

こんなカッコで、こんな奴に……私……」

ぐんぐん

ぢぢぢ

「あ、でも、生チ○ポで突かれるのは初めてだよね！」

でゆふ！ どうかかな？ 生まれて初めてのチ○ポの味は！」

「痛い……熱い……気持ち悪い……抜いて……お願い抜いてえ……」

「おやおや素直じゃないなあ……」

下のお口はこんなに僕のチ○ポを締め付けてるのに」

「ウソだ……こんなのウソだあ……ウソだ……」

絶対ウソ……ふあッ！ はああッ！！」

ぢぢぢ

「さして！ しっかり窓枠持っててね！ 動くよ！ イリヤちゃん！」
『はあぐツ！ い、イヤ……奥まで挿入ってきて……うぐうツ！』
「はあはあ……イリヤちゃん！」

イリヤちゃんの子宮におち○ちんゴリゴリしてるお！」

はっ

んんん

ぐん

おん

『うぐう……あツ！ はああ……んぐツ！ あうツ！』

「フヒヒ！ 分かってるねえ……しっかり声を押さえるんだよ？」

誰かに恥ずかしい姿を見られちゃうかもだからね！」

『さ、サイテー……んあツ！ あツ！ ぐう……はあツ！ あツ！』

（こ、声が出ちゃう……でも手を離したら、窓から落ちる！）

『はあツ！ あツ！ ふぐう……うツ！』

「んくツ……ふあツ！ あツ……はあツ！」
「でゆふふ！ 段々とエロい声になってきたねえ……
気持ちよくなってきたの？」

しびれ

「やめて……もうやめてえ……怖くて……」

痛くてえ……恥ずかしくて……あうツ！」

「あんツ！ そ、そんなに突いたら……」

お、落ちる……落ちちゃう！」

「フヒヒ！ 大丈夫だよ……」

イリヤちゃんは今、僕と合体してるんだから！」

「ほら！ わかる？ 僕のチ○コが

イリヤちゃんの一番奥深くまで差し込まれてるの！」

「いやあ……あぐツ！ あツ……ああツ！」

や、やめて……痛い！ 怖い！」

「つく！ そんなに締め付けたら……」

ああツ！ もうガマン出来ない！」

あうツ

あうツ

あうツ

「ふううう……出た出た……もう金玉カラツカラだよ」

『あッ……ううう……』

「どうだいイリヤたん、僕のドロドロザーメンの感想は？」

ぐんぐん

ぽん

ぐんぐん

ぽん

ぐんぐん

『なによ……何言ってるのかわかんないよお……』

『あう……あッ！ し、白いおしっこがあ……』

私のナカから……垂れてきて……』

『そ、そんなあ……こ、これが……』

私の身体のナカに……い、いっぱい……いっぱい……』

『う……ううッ……もうやだあ……』

助けて……お兄ちゃん……お兄ちゃん……』





















「さあお待ちませ、次は美遊さんの番だね」

《はあッ！ ああ……》

《ご主人さまのおち○ちん……嬉しいです》

「ぐふふ！ 自分から跨ってくるなんて、

美遊さんはすっかりエッチになったね！」

《はい……あッ！ ご主人さまのおち○ちんと魔力……

とっても気持ちよくて、大好きです》

《ふあッ……んッ！

龟头がゴリゴリ、私の子宮に当たって……はうッ！》

ムム

むちゅ

むちゅ

むちゅ

うふふ

ムム

「最初は泣き叫んでたのに……いやあ……

真面目な子ほど堕ちるものだなあ」

《ご主人さま……もっと固くして……

たっぷり可愛がってください……》

「でゆふ！ 自分で腰振っちゃって可愛いなあ……よしよし」
《ふあッ！ んッ……ご主人さまの手……》

《すごい……硬くて大きくて……ドキドキします》
「そうかい？ よしよし、いい子いい子……」

美遊たんはとってもエロくていい子だお！」

《はあ……嬉しいです、ご主人さま……もっと頑張ります》

《ふあッ！ んッ！ ああ……あッ！》

「ふひひ！ 美遊たんは健気で献身的な姿がぐうカワだお！」

ズグズグ

ずんずん

ずんずん

ずんずん

んーん

《んッ！ ああ……ふあッ！ ご主人さま……》

幸せです……ご主人さまに拾っていただいて……》

「僕も美遊たんを拾えて幸せだお！ たっぷり幸せになるうね！」

《はい、ご主人さま……んッ！ はああッ！！》

「でゆふ！ 出来立て精子を美遊たんに注入ううううッ！！」

《はああーッッッ！！》

「美遊たん、僕の精液気持ちいいかい？」

《はい……きもちいいです……あんッ！

し、子宮に、叩きつけられるみたい……》

う

どろどろ

あ

《はあッ！ あ……まだピクピクはねて……

子宮にどくどく流れ込んできます……》

《はいり……きらない……ああ……ふあッ！ あ、あふれちゃう……》

モロ

《ふあッ……ああ……あふう……》

「でゆふふ！ 膣内射精されながらいつぱいイっっちゃったね！」

《はい……いつぱい……イキましたあ……》

「よしよし……もつとエロくて良い子になるんだよ？」

ふ

《はあッ……あッ！ はい……ご主人さま……》

「でゆふふ……楽しみだなあ……みんなの口○マ○コが、お揃いで僕のチ○コの形になる目が……」

ひく

ひく

とと

んふん

ひく

《おそろい……イリヤと……》

ああ……してください……ご主人さま……》

「でゆふふ！ 美遊ちゃんはほんとうにいい子だなあ……よしよし」

《あん……ふああ……ご主人さまの手……》

《気持ちいい……もつと、撫でて下さい……》

「さあお待ちませ、次は美遊さんの番だね」

《はあッ！ ああ……》

「ご主人さまのおち○ちん……嬉しいです」

「ぐふふ！ 自分から跨ってくるなんて、

美遊さんはすっかりエッチになったね！」

《はい……あッ！ ご主人さまのおち○ちんと魔力……》

「とっても気持ちよくて、大好きです」

ムム

ずんずん

ずんずん

ずんずん

《ふあッ……んッ！

亀頭がゴリゴリ、私の子宮に当たって……はうッ！》

「最初は泣き叫んでたのに……いやあ……」

「真面目な子ほど堕ちるものだなあ」

《ご主人さま……もっと固くして……》

「たっぷり可愛がってください……」

「でゆふ！ 自分で腰振っちゃって可愛いなあ……よしよし」
《ふあッ！ んッ……ご主人さまの手……》

《すごい……硬くて大きくて……ドキドキします》
「そうかい？ よしよし、いい子いい子……」

美遊たんはとってもエロくていい子だお！」

《はあ……嬉しいです、ご主人さま……もっと頑張ります》

《ふあッ！ んッ！ ああ……あッ！》

「ふひひ！ 美遊たんは健気で献身的な姿がぐうカワだお！」

ズグズグ

ずんずん

ずんずん

ずんずん

んーん

《んッ！ ああ……ふあッ！ ご主人さま……》

幸せです……ご主人さまに拾っていただいて……》

「僕も美遊たんを拾えて幸せだお！ たっぷり幸せになるうね！」

《はい、ご主人さま……んッ！ はああッ！！》

《ああ……私のナカが、ご主人さまのおち○ちんで
いっぱいです……ふあッ！ ああッ！》

「さっきまでイリヤちゃんのカに挿入ってたおち○ぽだよ？」

余計に感じちゃうでしょ？」

《い、イリヤの……んあッ！ あッ……》

「言った途端、急に締め付けてきたねえ……」

そんなにイリヤちゃんが好きかい？」

んんんんん

んんんんん

んんんんん

ずちゅい

ずちゅい

ずちゅい

ずちゅい

《んッ……ああ……あッ！ はい、大好きです……》

「僕のおち○ぽとどっちが好き？」

《い、イリヤです……ふあッ！ んうッ！》

「ガーンだな。ちよつと傷つくなあ……」

そういう子にはお仕置きだ！」

《だ、だめッ！ 強くしたら……んあッ！ はああッ！……》

「でゆふ！ 出来立て精子を美遊さんに注入ううう〜ッ！！」

《はああーッッッ！！》

「美遊たん、僕の精液気持ちいいかい？」

《はい……きもちいいです……あんツ！

し、子宮に、叩きつけられるみたい……》

てく〜く〜

《はあッ！ あ……まだビクビクはねて……

子宮にどくどく流れ込んできます……》

《はいり……きまらない……ああ……ふあッ！ あ、あふれちゃう……》

！！





















「お待ちませクロちゃん……クロちゃんの番だお！ そりゃ！」

「ま、まって……お兄ちゃ……」

「い、今、いったばっかで……あッ！ はああッッ！！」

「アレ？ なんだかおま○こが既に出来上がってるみたいねえ……」

「ああッ！ あ……ああッ！ す、すごい……これが、本物……」

「イリヤからの感覚とは全然ちがう……」

「流れ込んでくる魔力で……い、意識とびそう……」

あんのん♡

「ああ、そーういや美遊たんが言ってたっけ？」

「イリヤちゃんの苦痛がクロちゃんにも伝わるって」

「い、イリヤにとっては苦痛でも……」

「私にとっては、快感ってってことかもね……」

「なんだか良くわかんないけど面白い関係だね！」

「よ〜し！ 本物を気に入ってもらえるように頑張っちゃうぞー！」

「だ、ダメ！ い、今動いたら感じすぎて……ああーッッッ！！」

アッッッ！！

アッッッ！！

アッッッ！！

アッッッ！！

「お待ちませクロちゃん……クロちゃんの番だお！ そりゃ！」

「ま、まって……お兄ちゃ……」

「い、今、いったばっかで……あッ！ はああッッ！！」

「アレ？ なんだかおま〇こが既に出来上がってるみたいねえ……」

「ああッ！ あ……ああッ！ す、すごい……これが、本物……」

「イリヤからの感覚とは全然ちがう……」

「流れ込んでくる魔力で……い、意識とびそう……」

あん♡

「ああ、そーういや美遊たんが言ってたっけ？」

「イリヤちゃんの苦痛がクロちゃんにも伝わるって」

「い、イリヤにとっては苦痛でも……」

「私にとっては、快感ってってことかもね……」

「なんだか良くわかんないけど面白い関係だね！」

「よ〜し！ 本物を気に入ってもらえるように頑張っちゃうぞ！」

「だ、ダメ！ い、今動いたら感じすぎて……ああーッッッ！！」

アッッッ！！

アッッッ！！

アッッッ！！

アッッッ！！

【あうツ！ あツ……くああツ！

お、お兄さま……らめえ……もおやあツ！】

「でゆふふ！ さつきからイキッ放しだねクロたん！

何回目かわかる？」

【ふあツ！ あツ！ わかんない……

もうなにもわかんないいいい！！】

「僕も数えてないから安心してね？

でもひどいなあ……

僕はまだ一回もイってないのに……」

あーとーとー

ズン
ズン
ズン

ズン
ズン

ズン
ズン
ズン
ズン

【いやツ！ 奥う……ごりごりしちや……はああツ！！】

「クロたんは三人のナカで一番積極的なクセに……

責められると弱いんだね」

【はあツ！ ああツ！ お、おち○ちん奥まで来てえ……

イク！ またイっちゃうううーツツ！！】

ズン
ズン
ズン
ズン

【うッ……あッ……はああ……うッ!】

「ふう、出した出した……よく頑張ったね、クロちゃん」

【しゅーいらい……あ、あふれちゃう……】

「こないっぱいの魔力……はじめてえ……」

「美遊ちゃんもよくそう言うんだけど……」

「なんたる、そういう設定が学校で流行ってるのかな?」

くふくふ

どき

どき

ふく

【ああッ……あッ! うあ……ああ……】

「クロちゃんはお返事も出来ないくらい」

盛大にイっちゃうよね……いやらしい子だなあ」

【だ、だって……お、お兄ちゃんの魔力……】

す、すごすぎる……から……】

「フヒヒ! 気に入ったなら毎日でもあげるよ? 楽しみにしててね!」

【ああ……うッ……ふああ……はあい……いっばい……】

ちようだい……ぜんぶ、受け止めてあげるから……あッ!】























「でゅふふ！ 朝のお風呂は気持ちいいねえ……」

《はい、ご主人さま……あツ！ きもちいです……》

「ふあツ！ んツ！ あ……このボディソープ……

ぬるぬるして、おかしいよお……」

ふふふ

ムム

ムム

ムム

んんん

「ふひひ！ みんな昨日はたっぷり汗かいたからね！

全身でゴシゴシして、しっかりキレイになるんだよ？」

『いや……思い出したくないのに……』

「うふふ……お兄ちゃんったら、

あんなに出したのに、もう精液たまってるのね？」

「つくお！ クロちゃん！ そんなにゴシゴシしたら……」

「はああ……すつごくエツチなおい……」

「ちようだい……お兄ちゃんの精液……もう一回……」



「お風呂の湯が熱い……」

「まやああッ！ すすすッ……」

ぷるぷる

ぷるぷる

イロイロ

「クロ……ずるい……」

「うう……またその白いおしっこ……」

「ああ……顔にかかって……やんッ！」

熱ッ！ ふあッ！ ああッ……」

ぷるぷる

びしょ



「ふう、まったくクロちゃんは悪戯っ子だなあ……」

「はああ……一晩でこんなに溜めちゃうだなんて……」

「お兄ちゃんってば絶倫なんだから」

「ああ……濃くって……ドロドロで……すごい匂い……」

《き、昨日のおしっこの匂いと、おち○ちんと、
精液の匂いが混ざって……あッ……》

「ああ……へ、へんな匂いが
喉に貼りついちゃう……ふあッ

「みんなのエッチな体臭まで混ざってきたねえ……でゆふ！」

「いやあ……やめてえ……こんな匂い……ヤダあ……」

「とつてもエッチな匂いじゃない……」

「嗅ぐだけでムズムズしちゃう……」

《はああ……ご主人さま……身体が、ヘンです……》

「でゆふふ！ こりやししばらく換気扇は使用禁止だなあ……」

「でゅふふ！ 朝のお風呂は気持ちいいねえ……」

《はい、ご主人さま……あツ！ きもちいです……》

「ふあツ！ んツ！ あ……このボディソープ……

ぬるぬるして、おかしいよお……」

ふふふ

ムムム

ムムム

「ふひひ！ みんな昨日はたっぷり汗かいたからね！

全身でゴシゴシして、しっかりキレイになるんだよ？」

『いや……思い出したくないのに……』

「うふふ……お兄ちゃんったら、

あんなに出したのに、もう精液たまってるのね？」

「つくお！ クロちゃん！ そんなにゴシゴシしたら……」

「はああ……すつごくエッチなおい……」

「ちようだい……お兄ちゃんの精液……もう一回……」

「ふう、まったくクロちゃんは悪戯っ子だなあ……」

「はああ……一晩でこんなに溜めちゃうだなんて……」

「お兄ちゃんってば絶倫なんだから」

「ああ……濃くって……ドロドロで……すごい匂い……」

《き、昨日のおしっここの匂いと、おち○ちんと、
精液の匂いが混ざって……あッ！》

「ああ……へ、へんな匂いが

喉に貼りついちゃう……ふあッ！ あ……」

「みんなのエッチな体臭まで混ざってきたねえ……でゆふふ！」

「いやあ……やめてえ……こんな匂い……ヤダあ……」

「とつてもエッチな匂いじゃない……」

「嗅ぐだけでムズムズしちゃう……」

《はああ……ご主人さま……身体が、へんです……》

「でゆふふ！ こりやしばらく換気扇は使用禁止だなあ……」













「ふううう……お外は気持ちいいねイリヤちゃん」

「うう……なんでこんなトコで……こんなカツコでえ……」

「そのコスプレエロいよねえ……でゆふふ！」

イリヤちゃんの好きなアニメなのかな？」

「どうでもいいから……早く終わらせてよ……」

「あいかかわらずイリヤちゃんはつれないなあ……あ、ツンデレなのかな？」

「こ、この人……話通じない……」

「うう……ルビィ……いるの？ いないの？ いるなら早く助けて……」

ふううう……

ア……

ア……

ア……

——イリヤああーッッッ!! どこだああ!!

『……ひいッ!』

——たっつん! そんなところには居ないって!

——イリヤああーッッッ!! オレはここだああ!!

——ああ! もうあのバカー一回捕まえる!

(み、皆の声……私を捜して!?)

「おやおや、お友達かな? 誘拐……」

もとい、保護してから目も浅いのに、大げさだなあ……」

「んッ! くあ……あッ! んッ……」

ゆた

ゆた

ゆた

アッ

アッ

アッ

「でゆふ! どうしたんだい? そんなに声を抑えて……」
(い、こんなところみんなに見つかったら……死んじゃう!)
「ああッ! イリヤちゃんのその顔はキクなあ! 見つかったら面倒だし……そろそろいいかな?」

ギョ

「きゃあッ! やッ……はあッ!」

「ハアハアッ!

い、イリヤちゃんの腋マ○コに精液吸い込まれるう!」

(うう……気持ちわるい……気持ち悪い……)

「ほら! 顔にもかけるよ! こっち向いて!」

「やあッ! ああッ……あッ! 熱い……臭い……!」

——こっちかイリヤああ! 絶対見つけてやるぞお!

はわっ!!

(こっちに来てる! お願い早く終わってえ!)

「でゆふふ! 精液とまんないお!

イリヤちゃんは全身おま○こだね!」

『ふあッ! ああ……やだ……やだあ……あう』

「ハアハア……よ、予想以上に出てしまった……」

『うあ……あッ！ ううう……』

「いっぱい精液シャワー浴びちゃったね！」

カワイイよイリヤちゃん！」

『うう……もうやめて……やめてよお……』

おウチに帰して……お願いだから……』

「フヒヒ！ そうだね、早く帰って、

美遊たんやクロちゃんと一緒にしようか」

びび

ぞろぞろ

びび

『……』

「おっと、みつかったちゃうそうだ……これは急がねば！」

ぞろ

「ふううう……お外は気持ちいいねイリヤちゃん」

「うう……なんでこんなトコで……こんなカツコでえ……」

「そのコスプレエロいよねえ……でゆふふ！」

イリヤちゃんの好きなアニメなのかな？」

「どうでもいいから……早く終わらせてよ……」

「あいかかわらずイリヤちゃんはつれないなあ……あ、ツンデレなのかな？」

「こ、この人……話通じない……」

「うう……ルビィ……いるの？ いないの？ いるなら早く助けて……」

ふううう……

ア……

ア……

ア……

——イリヤああーッッッ!! どこだああ!!

『……ひいッ!』

——たっつん! そんなところには居ないって!

——イリヤああーッッッ!! オレはここだああ!!

——ああ! もうあのバカ一回捕まえる!

(み、皆の声……私を捜して!?)

「おやおや、お友達かな? 誘拐……」

もとい、保護してから目も浅いのに、大げさだなあ……」

「んッ! くあ……あッ! んッ……」

ゆた

ゆた

ゆた

「でゆふ! どうしたんだい? そんなに声を抑えて……」

(い、こんなところみんなに見つかったら……死んじゃう!)

「ああッ! イリヤちゃんのその顔はキクなあ!

見つかったても面倒だし……そろそろいいかな?」

アッ

アッ

アッ

ギョ

ギョ

『きゃあッ！ やッ……はあッ！』

「ハアハアッ！」

い、イリヤちゃんの腋マ○コに精液吸い込まれるうー！」

（うう……気持ちわるい……気持ち悪い……）

「ほら！ 顔にもかけるよ！ こっち向いて！」

『やあッ！ ああッ……あッ！ 熱い……臭い……』

——こっちかイリヤああ！ 絶対見つけてやるぞお！

はわっ！！

（こっちに来てる！ お願い早く終わってえ！）

「でゆふふ！ 精液とまんないお！」

イリヤちゃんは全身おま○こだね！」

『ふあッ！ ああ……やだ……やだあ……あう』

「ハアハア……よ、予想以上に出てしまった……」
「うあ……あッ！ ううう……」

「いっぱい精液シャワー浴びちゃったね！
カワイイよイリヤちゃん！」

「うう……もうやめて……やめてよお……
おウチに帰して……お願いだから……」
「アッヒヒ！ そうだね、早く帰って
美遊たんやクロちゃんと続きしようか」

うん
だ
ま
ん
ん

「おっと、みつかったちゃうそうだ……これは急がねば！」

















「ふあッ……んッ……ちゅ……お兄ちゃんってば、

イリヤだけ連れてっちゃうんだから……酷いわよね美遊？」

《ぢゅる……ちゅ……クロのおま○こ……イリヤの味に似てる……》

「やんツ！ 美遊のおま○こだって……」

ちよっとお兄ちゃん味の味がするわよ？ ヤリすぎじゃない？

くふっ♡♡

ちゅ♡

ちゅ♡

《いっぱい……してもらったから……んッ！》

「うふふ……美遊ってば、本性のエロさ全開ね……」

こんないけない子だったなんて驚き」

《クロだって……昨日、一番イってたのはクロ……》

「仕方ないじゃない……」

イリヤの分まで感じちゃってたんだから……あッ！

ちゅ♡

ちゅ♡

「うふふ……イリヤってば、

お兄ちゃんに可愛がってもらってるみたい……」

あはっ♡♡

《……むう》

「きゃうッ！ あよ、ちよつと美遊……舌、そんなにしちや……あんッ！」

《クロは……イリヤとたくさんいっしょですよ、ずるい……》

「し、仕方ないでしょ？ 事情が事情なんだから……あッ！ はあッ！」

《ちゆるッ……ちゆ……どんどん、
エツチなおツユが出てくる……ちゆるッ！》
「やあッ！ 美遊……そんなエツチになめちや……ふあッ！ んッ！」

《クロ……イリヤみたいで……ちよつとカワイイ……》
「もおッ！ さつきからイリヤイリヤって……このッ！」

《ふあッ! んッ……はああッ!》
【ちゆる……美遊のいやらしいおま○ふ……】
《クロ……だ、だめえ……ふあッ! ああッ!》

「お兄ちゃんにいつぱい広げてもらったのね……
どんどん舌が挿入っていつちやう……」
《ああッ! んッ……ふあ……あッ!》

【声もいやらしい……
あなたがこんな痴女だったなんて、ホントに意外ね】
《クロ……んッ! はあッ!
だめ……そんなにしたらあ……ああッ!》



《はッ……んッ！ ちゆる……ちゅばあ……》

「んッ！ 美遊……焦らないで……はあッ！」

《あなたに、好き放題言われたくない……》

「負けず嫌いね……身体はこんな素直なもの……んッ！」

《はあッ！ あッ……ちゅ……ちゅる！

イリヤの味……んちゆるッ！ ちゅぶッ！》

「またイリヤって……ちゆるッ！ 悪い子！」

はあッ！ んあッ……ちゅッ！」

《んッ！ あう……んちゅ！ あん……ちゅぶう……ちゅるる……！》

「ふあッ！ んッ！ あッ！ ああ……んッ！ ちゅばあ……ちゆるッ！」

《ふううッ！ あッ！

ああ……っ、強すぎ……んうッ！》

「はああ……んッ！ だ、だめえ……

もう私……ふあッ！ ああッ！」



「んっ！ やああーっっっっっ」

「ふぁっ！ はああーっっっっっ」

あ あ あ あ あ あ

あ あ あ あ あ

ア ア ア ア ア

「ハア……ハア……やあ……あッ！」

「美遊ってば……」

「おもしろしてみたみたい……」

「ふあッ！ あ……」

「クロだって……あう……」

「お兄ちゃん早く返ってこないかしら……」

「美遊の魔力も悪くないんだけど、」

「一度アレを知っちゃったら……」

「んッ……ちゆる……ちゅばあ……」

「クロの愛液……イリヤの味っばい……」

「んッ！ やん……もう……」

「そればかりなんだから……」

「ふあッ……んッ……ちゅ……お兄ちゃんってば、

イリヤだけ連れてっちゃうんだから……酷いわよね美遊？」

《ぢゅる……ちゅ……クロのおま○こ……イリヤの味に似てる……》

「やんツ！ 美遊のおま○こだって……」

ちよつとお兄ちゃん味の味がするわよ？ ヤリすぎじゃない？」

《いっばい……してもらったから……んッ！》

「うふふ……美遊ってば、本性のエロさ全開ね……」

こんないけない子だったなんて驚き」

《クロだって……昨日、一番イってたのはクロ……》

「仕方ないじゃない……」

イリヤの分まで感じちゃってたんだから……あッ！」

「うふふ……イリヤってば、

お兄ちゃんに可愛がってもらってるみたい……」あはっ♡

《……むう》

「きゃうッ！ ちよ、ちよつと美遊……舌、そんなにしちや……あんッ！」

「クロは……イリヤとたくさんいっしょですよ、ずるい……」

「し、仕方ないでしょ？ 事情が事情なんだから……あッ！ はあッ！」

「ちゆるッ……ちゆ……どんどん、」

「エツチなおツユが出てくる……ちゆるッ！」

「やあッ！ 美遊……そんなエツチになめちや……ふあッ！ んッ！」

「いっ」

「いっ」

「いっ」

「いっ」

「クロ……イリヤみたいで……ちよつとカワイイ……」

「もおッ！ さつきからイリヤイリヤって……このッ！」

《ふあッ！ んッ……はああッ！！》

【ちゆる……美遊のいやらしいおま○……】

《クロ……だ、だめえ……ふあッ！ ああッ！！》

あーん

あッ！

あッ！

あッ！

【お兄ちゃんにいっぱい広げてもらったのね……
どんどん舌が挿入っていつちやう……】
《ああッ！ んッ……ふあ……あッ！》

あッ！

あッ！

あッ！

【声もいやらしい……】

あなたがこんな痴女だったなんて、ホントに意外ね】

《クロ……んッ！ はあッ！

だめ……そんなにしたらあ……ああッ！》

【んっ！ やああーっっっっ！】

《ふぁっ！ はああーっっっっ！》



「ハア……ハア……やあ……あッ！」

「美遊ってば……」

「おもしろしてみたみたい……」

「ふあッ！ あ……」

「クロだって……あう……」

「お兄ちゃん早く返ってこないかしら……」

「美遊の魔力も悪くないんだけど、」

「一度アレを知っちゃったら……」

「ひく」

「ひく」

「んッ……ちゆる……ちゅばあ……」

「クロの愛液……イリヤの味っばい……」

「んッ！ やん……もう……」

「そればかりなんだから……」

「ひく」

「ひく」

























「フヒヒただいまクロちゃん！ 良い子にしてたかな？」

「うんツ！ とつてもいい子にしてたんだから」

「でゆふ！ それじゃ、お待ちかねのチ○ポだよ？」

「二人で仲良く分けあってね！」

「なんで……クロとこんなことしなきゃいけないの……」

えへへへ

「思いついちやってね！ 二人は姉妹なのかな？」

「ううして見ると鏡合わせみたいだね！」

「やんツ！ イリヤなんかより、

私のほうがいいんだから……んツ！ ふあ……」

「なに……どうしたのクロ……なにしてるの……」

ぬたが

ズン

「でゆふふ！ 流石はクロちゃん！

よくわかってるねえ！ とつてもエロい腰使いだよ！」

「うふふ……お兄ちゃんに褒めてもらえるなんて……嬉しい。

んツ！ はあ……あツ！」

「ほら、なにしてるの？ イリヤもするのよ？」

「うう……やだよ……絶対ヘンだよ……」

「はあッ！ んッ！ ああ……あッ！

カリに引っかかって……やんッ！」

「ふあッ！ あ……うう……あんッ！」

「でゅふふ！ プニプニの

ダブルロ○マ○コに挟まれてえ……これは天国！」

「あふッ！ ふああ……んああッ！

おち○ちんピクピクして……んッ！ あんッ！」

「ハア……あッ！ ふああ……ひぐッ！

すごい……こうしてるだけで……身体中、

ぞくぞくして……はああッ！」

「相変わらずクロちゃんは感じやすいなあ……

普通の2倍くらいは感じてるんじゃない？」

「い、今はイリヤと一緒にだから……

実際そうかもね……んッ！ はあッ！」

「やめてえクロ……そんな……

えっちな顔しないで……声出さないで……

「な、なんだかこっちまでヘンな気持ちに……

んあッ！ やああッ！」

「いくよ二人とも!」

「お、私も……はああッッ!」

「きゃうッ! イヤ! ま、また出てえ……ああッ! はああッ!」

「すごい……私が射精してるみたい……んッ! はあッ!」

ぬぬぬ

ぐんぐん



「ま、まだピクピクしてえ……んッ! あああッ! だっだっだっ!」

「でゆふふ!」二人とも見分けがつかないくらい
真っ白に染めてあげるお!」

「はああッ! かけて! もつとかけてええ!」

「もういいからあ! 早く終わってええ!」

ぐんぐん



「ハアハア……た、たっぷり出せたね！ えらいよ二人とも！」
「あッ……はああ……相変わらずすごい……噴水みたい……」
「うう……ドロドロしてえ……気持ち悪い……はきそう……」

「イリヤってばお子さまねえ……」

「この、魔力がドクドク流れ込んでくる感じがわからない？」
「わかんないよお……どうしちゃったのクロ……もう帰るうよお……」

「はああ……お兄ちゃんの精液……」

「でめふふ！ クロちゃんはロ○ビッチだなあ……もちるんあびるよ！
今度は美遊ちゃんも入れてね……でめふふふふ！！」

「フヒヒただいまクロちゃん！ 良い子にしてたかな？」

「うんツ！ とつてもいい子にしてたんだから」

「でゆふ！ それじゃ、お待ちかねのチ○ポだよ？」

「二人で仲良く分けあってね！」

「なんで……クロとこんなことしなきゃいけないの……」

えへへへ

「思いついちやっつてね！ 二人は姉妹なのかな？」

「こうして見ると鏡合わせみたいだね！」

「やんツ！ イリヤなんかより、

私のほうがいいんだから……んツ！ ふあ……」

「なに……どうしたのクロ……なにしてるの……」

ぬぢぢ

ズン

「でゆふふ！ 流石はクロちゃん！

よくわかってるねえ！ とつてもエロい腰使いだよ！」

「うふふ……お兄ちゃんに褒めてもらえるなんて……嬉しい。んツ！ はあ……あッ！」

「ほら、なにしてるの？ イリヤもするのよ？」

「うう……やだよ……絶対ヘンだよ……」

「はあッ！ んッ！ ああ……あッ！

カリに引っかかって……やんッ！」

「ふあッ！ あ……うう……あんッ！」

「でゅふふ！ プニプニの

ダブルロ○マ○コに挟まれてえ……これは天国！」

「あふッ！ ふああ……んああッ！

おち○ちんピクピクして……んッ！ あんッ！」

「ハア……あッ！ ふああ……ひぐッ！

すごい……こうしてるだけで……身体中、

ぞくぞくして……はああッ！」

「相変わらずクロちゃんは感じやすいなあ……

普通の2倍くらいは感じてるんじゃない？」

「い、今はイリヤと一緒にだから……

実際そうかもね……んッ！ はあッ！」

「やめてえクロ……そんな……

えっちな顔しないで……声出さないで……

「な、なんだかこっちまでヘンな気持ちに……

んあッ！ やああッ！」

「ハアハア……た、たっぷり出せたね！ えらいよ二人とも！」
「あッ……はああ……相変わらずすっごい……噴水みたい……」
「うう……ドロドロしてえ……気持ち悪い……はきそう……」

「イリヤってばお子さまねえ……」

「この、魔力がドクドク流れ込んでくる感じがわからない？」
「わかんないよお……どうしちやっただのクロ……もう帰るうよお……」

「はああ……お兄ちゃんの精液……」

「肌にとわりついて……とっても気持ちいい……もっとな」
「でゅふふ！ クロちゃんはロ○ビッチだなあ……もちるんあびるよ！
今度は美遊ちゃんも入れてね……でゅふふふふ！！」

















「ハアハア……っ、ツルツルのロ○マ○コが三つ……」

「いやあ……見ないで……放してえ……こんな絶対おかしいよ……」

《ああ……イリヤ……イリヤがこんな近くに……》

「ふあッ！ ああ……美遊う……うごいたら……」

い、いるんなトコ擦れて……」

「あッ！ こんなエッチなカツコ……」

【見られてるだけで、感じちゃう……】

「でゆふ！ どのおマ○コも、濡れ濡れで準備万端みたいだね！」

「ねえお兄ちゃん……」

いつまでも見てないで、早くちようだしい？」

「ど、どのおマ○コも魅力的だなあ……」

ふひひ！ 誰から食べちゃおうかなあ？」



くまひん

うー

いぬ

「ま、まずはイリヤちゃん!」

「ひぐツ! あツ……ああ……いやあツ!」

「はあンツ! こ、こつちまで感触が流れ込んできて……やあツ!」
「でゆふう! まだまだ初物の新品感!」

「ゴリゴリ掘り進めるような感触がたまりませんなあ!」

ズ
ズ
ズ

ぐ
ぐ
ぐ

「いあツ! んツ! ああ……そ、そんな奥まで挿入れちゃ……やあツ!」

「あツ! ふあ……ああツ! な、ナカが太いので広げられちゃう……!」

「こ、この狭さとキツさ……ふひひ!

さっそく出ちやいそうだお!」

「い、いや……もうあんなのやだあ! お、お願い抜いてえ!」

「そうかい? ではお望み通りに……!」

「ヤツ! 急に抜いたら……はああンツ!」

「ああツ! こ、こりつてえ!

「ゴリつてしてえ……ふあツ! んらツ!」

く
く
く

あ
あ
あ

あ
あ
あ

「さあッ！ 次は美遊たんの番だお！」

《きやあうッ！ あッ！ ああ……挿入ってえ……ああッ！》

「美遊たんは一番早くここに来たから、

もうすっかり僕のカタチに広がっちゃってるね！」

《は、はい……ご、ご主人さまに、

たくさんしてもらったから……ああッ！》

「どうだい？ つい数秒前まで

イリヤちゃんのナカを犯してたチ○ポだよ？」

《う、嬉しいです……はあッ！

い、イリヤのエッチな愛液が、たくさん絡みついてて……》

「やめて美遊う……そんなこと言わないでえ……」

《ふあッ！ ああ！ ご、ご主人さま……お、奥まで犯してえ……》

「でゆふふ！ もちろんだけど……順番だからね！」

おどろい

くわんわん

あはは

んんん

「お次はクロちゃんだ！」

「きゅんッ！ あッ……はああーッッッ！」

「おうッ！ クロちゃんはまた挿入れただけでイっちゃったの？」

「だ、だってコレえ……すごすぎて……」

「ぜんぜんガマンできないんだもん……」

「でゅふふ！ 嬉しいよクロちゃん……」

「今日はもっともっとイかせてあげるからね！」

「はああッ！ つ、強くしちゃ……」

「頭しびれて……んあッ！ あああーッッ！」

「つくう！ イリヤちゃん以上の締め付け！ ち○こもげそうだお！」

「ああッ！ はあッ！ んッ……ほ、ホント？」

「イリヤよりも私のほうがいい？」

「そうだなあ……カタチはイリヤちゃんともそっくりなのだ……」

「締め付けの力はクロちゃんだなあ」

「やった……うふふふ…… お兄ちゃんに褒められちゃった……」

お兄ちゃん

お兄ちゃん

お兄ちゃん

「さて、ただいまイリヤちゃん！」

「ひぐらうツ！ ま、また挿入って……ああツ！」

「あうツ！ い、イリヤばかりずるい！」

「ふひひ！ クロちゃんと美遊たんには手マンしてあげるからね！」

《はあツ！ ああ……ご、ご主人さまの指い……》

「よ、弱いところに当たって……ひぐらうツ！」

「た、ただでさえイリヤとダブって感じてるのに……」

「さあ！ みんなぐちゃぐちゃしてあげるからね！」

「はああーッッッ！ いやツ！」

「だめえ！ そんなに強くしないでえ！」

《い、イリヤの汗が……愛液が……つばが……

いっばいくるう……ふあああツ！》

「おち○ぽが！ 指が動き回ってえ……

か、感覚がおかしくなる……ああツ！

はああーッッッ！》

ぬてよ
くちが

ぬてよ
くちが

「はあ……はあ……はあ……はあ……あう……いっぱい……
ドロドロが……いっぱい……」

「でゆふふ！ よかったよイリヤちゃん……」

「んツ！ はああ……ねえお兄ちゃん……」

「これで終わりじゃないでしょお？」

《指じゃ、たりません……ください……》

《ご主人さま……イリヤと同じの……》

「やれやれ……いったばかりなのに、困った子たちだな……」

「ねえ……早くう……ズボズボに犯して……」

「ナカに本物の精液ちよくだい……」

《私も……お願いします……早く……もうガマンできない……》

「仕方ないなあ……今夜は「一晚中犯してあげるからね3人とも！」

「うツ……ああ……だ、だめえ……もう、ムリ……ムリだからあ……」



「……ふうッ！ イ、イクラー！」

「あうッ……あッ！ あああ……」

「流石にイリヤちゃんもリアクションがなくなってきたね……
もう夜が明けちゃう時間だよ」

「ああッ……んッ！ ああ……あ、あふれてる……精液……魔力……」

《お腹が……ご主人さまので、いっぱい……いっぱい……》

「ふあッ……ああ……うう……わかんない……もうわかんない……」

「いやあ……出した出した！」

「流石にもう金玉カラカラになっちゃったよ……」

「三人とも、ザーメンドロドロで気持ちよさそうだね……でゆふ！」

「それじゃ、今日はなにとして遊びたい？」

「でゆふふ！ たっぷり可愛がってあげるからね！」

「あ……うう……うあ……もっ……ゆるしてえ……」

「ハアハア……っ、ツルツルのロ○マ○コが三つ……」

「いやあ……見ないで……放してえ……こんな絶対おかしいよ……」

《ああ……イリヤ……イリヤがこんな近くに……》

「ふあッ！ ああ……美遊う……うごいたら……」

い、いるんなトコ擦れて……」

「あッ！ こんなエッチなカツコ……」

【見られてるだけで、感じちゃう……】

「でゆふ！ どのおマ○コも、濡れ濡れで準備万端みたいだね！」

「ねえお兄ちゃん……」

いつまでも見てないで、早くちようだしい？」

「ど、どのおマ○コも魅力的だなあ……」

ふひひ！ 誰から食べちゃおうかなあ？」



くっくっ

うっ

くっくっ

「ま、まずはイリヤちゃん!」

「ひぐツ! あツ……ああ……いやあツ!」

「はあンツ! こ、こつちまで感触が流れ込んできて……やあツ!」
「でゆふう! まだまだ初物の新品感!」

「ゴリゴリ掘り進めるような感触がたまりませんなあ!」

ぜい

ぐわ

「いあツ! んツ! ああ……そ、そんな奥まで挿入れちゃ……やあツ!」

「あツ! ふあ……ああツ! な、ナカが太いので広げられちゃう……!」

「こ、この狭さとキツさ……ふひひ!

さっそく出ちやいそうだお!」

「い、いや……もうあんなのやだあ! お、お願い抜いてえ!」

「そうかい? ではお望み通りに……!」

「ヤツ! 急に抜いたら……はああンツ!!」

「ああツ! こ、こりつてえ!

ゴリつてしてえ……ふあツ! んらツ!」

くわ

あ

あ

「さあツ！ 次は美遊たんの番だお！」

《きやあうツ！ あツ！ ああ……挿入ってえ……ああツ！！》

「美遊たんは一番早くここに来たから、

もうすっかり僕のカタチに広がっちゃってるね！」

《は、はい……ご、ご主人さまに、

たくさんしてもらったから……ああツ！》

「どうだい？ つい数秒前まで

イリヤちゃんのナカを犯してたチ○ポだよ？」

《う、嬉しいです……はあツ！

い、イリヤのエッチな愛液が、たくさん絡みついてて……》

「やめて美遊う……そんなこと言わないでえ……」

《ふあツ！ ああ！ ご、ご主人さま……お、奥まで犯してえ……》

「でゆふふ！ もちろんだけど……順番だからね！」

おどろい

くわんわん

あつあつ

くわんわん

「お次はクロちゃんだ！」

「きゃンツ！ あツ……はああー……ツツ！！」

「おうツ！ クロちゃんはまた挿入れただけでイっちゃったの？」

「だ、だってコレえ……すごすぎて……」

「ぜんぜんガマンできないんだもん……」

「でゅふふ！ 嬉しいよクロちゃん……」

「今日はもっともっとイかせてあげるからね！」

「はああツ！！ つ、強くしちゃ……」

「頭しびれて……んあツ！ あああー……ツツ！！」

「つくう！ イリヤちゃん以上の締め付け！ ち○こもげそうだお！」

「ああツ！ はあツ！ んツ……ほ、ホント？」

「イリヤよりも私のほうがいい？」

「そうだなあ……カタチはイリヤちゃんともそっくりなのに……」

「締め付けの力はクロちゃんだなあ」

「やった……うふふふ…… お兄ちゃんに褒められちゃった……」

お兄ちゃん

お兄ちゃん

お兄ちゃん

「さて、ただいまイリヤちゃん！」

「ひぐらうツ！ ま、また挿入って……ああツ！」

「あうツ！ い、イリヤばかりずるい！」

「ふひひ！ クロちゃんと美遊たんには手マンしてあげるからね！」

《はあツ！ ああ……ご、ご主人さまの指い……》

「よ、弱いところに当たって……ひぐらうツ！」

た、ただでさえイリヤとダブって感じてるのに……」

「さあ！ みんなぐちゃぐちゃしてあげるからね！」

「はああーッッッ！ いやツ！」

だめえ！ そんなに強くしないでえ！」

《い、イリヤの汗が……愛液が……つばが……

いっばいくるう……ふあああツ！》

「おち○ぽが！ 指が動き回ってえ……

か、感覚がおかしくなる……ああツ！

はああーッッッ！》

ぬてよ
くちが

ぬてよ
くちが

あーッッッッ

「い、いくよ！ まずはいりやちゃんに膣内射精い！」「いやああー！ツツ！」

「はああツ！！ ドピュドピュでてるう！！
し、子宮に打ち付けられてえ！ ああツ！！」

ぬせが
ぬせが
いぢらみ
いぢらみ

キキキ

《だめ！ あああー！ツツ！！ イっちやう！ イっちやう！！》

「いいよ！ みんな仲良くイっちやえ！ ほらほらあ！！」

「はああー！ツツ！！ やめて！

もうやめてええ！！ これ以上注ぎ込まないでええ！」

「はああツ！ イクのとまんない！！ とまんないよおお！！」

《ああツ！ やああツツ！！》



「はあ……はあ……はあ……はあ……あう……いっぱい……
ドロドロが……いっぱい……」

「でゆふふ！ よかったよイリヤちゃん……」

「んツ！ はああ……ねえお兄ちゃん……」

「これで終わりじゃないでしょお？」

《指じゃ、たりません……ください……》

《ご主人さま……イリヤと同じの……》

「やれやれ……いったばかりなのに、困った子たちだな……」

「ねえ……早くう……ズボズボに犯して……」

「ナカに本物の精液ちよくだい……」

《私も……お願いします……早く……もうガマンできない……》

「仕方ないなあ……今夜は「一晚中犯してあげるからね3人とも！」

「うツ……ああ……だ、だめえ……もう、ムリ……ムリだからあ……」



「……ふうッ！ イ、イクラー！」

『あうッ……あッ！ あああ……』

「流石にイリヤちゃんもリアクションがなくなってきたね……
もう夜が明けちゃう時間だよ」

「ああッ……んッ！ ああ……あ、あふれてる……精液……魔力……」

『お腹が……ご主人さまので、いっぱい……いっぱい……』

「ふあッ……ああ……うう……わかんない……もうわかんない……」

「いやあ……出した出した！」

「流石にもう金玉カラカラになっちゃったよ……」

「三人とも、ザーメンドロドロで気持ちよさそうだね……でゆふ！」

「それじゃ、今日はなにとして遊びたい？」

「でゆふふ！ たっぷり可愛がってあげるからね！」

『あ……う……うあ……もっ……ゆるしてえ……』

































「はぁあッ！ んう……ねえ、お兄ちゃん……もどかしいの……早くちよくだい？」

《私も、もう挿入りますから……ああ……ほら、こんなに濡れて……》

「ご主人さまあ……私も……見てえ……」

「こんなにいやらしく広げられるよ？ ほらあ……」

「3人ともガマンが足りないなあ……でゅふー！」

挿入れて欲しかったら早くイクんだおー！

んふーん

「もお、お兄ちゃんのリンダール……」

《ご主人さまのおちん○んじやないと、いけないのだ……》

「あん……お願いします……犯してください……ご主人さまあ……」

めんどめんど

じやあつ

めんどめんど

じやあつ

めんどめんど

「はぁあッ！ んう……ねえ、お兄ちゃん……もどかしいの……早くちよくだい？」

《私も、もう挿入りますから……あぁ……ほら、こんなに濡れて……》

「ご主人さまぁ……私も……見てえ……」

「こんなにいやらしく広げられるよ？ ほらぁ……」

「3人ともガマンが足りないなぁ……でゅふー！」

挿入れて欲しかったら早くイクんだおー！

んふーん

「もお、お兄ちゃんのイジワル……」

《ご主人さまのおちん○んじやないと、イけないのよ……》

「あん……お願いします……犯してください……ご主人さまぁ……」

めんどめんど

じゅぽんぽん

じゅぽんぽん

じゅぽんぽん

じゅぽんぽん











